

## ■ ジョウゼフ・コンラッド協会(英国) 第 46 回年次大会

ロンドン到着翌日、快晴の中、Victoria Coach Station 近くの馴染みの安宿を出発し、Vauxhall 駅から約 30 分の鉄道の旅を経て、Strawberry Hill という愛らしい名前の駅で降りる。この駅の北側にはあのラグビーの聖地 Twickenham Stadium が、そして南側には夏のガーデンフェスティバルで知られる Greenfingers の聖地 Hampton Court Palace がある(さらに少し離れた東側には、同時期に大会が開催されていたテニスの聖地 Wimbledon も!)。そうした英国文化の聖地に囲まれた Strawberry Hill 駅から数分ほど歩いたところに、今回の目的地、セント・メアリーズ大学がある。同大学には本協会顧問の Allan H. Simmons 先生を中心とした The Centre for Joseph Conrad Studies があり、かつて故 John H. Stape 先生も関わられていた。そんなコンラッド研究の「聖地」の一つといえる大学が、今回の大会の最初の会場だった。

第 46 回大会は 2019 年 7 月 5 日から 7 日まで 2 つの会場で開催された。最初の 1 日半はセント・メアリーズ大学(右写真)、そして最後の 1 日はロンドン中心部のメイフェアにある University Women's Club。鉄道やバスを乗り継いででの会場移動を伴う、珍しい形での学会出席となった(ご参考ま



でに記しておく)と、地理と通貨に不慣れな出席者にとっては、スマートフォンの Google Map による乗換案内と、英国の商店や交通機関で普及している Contactless 決済の可能なカードが非常に便利だった)。2 日目午後は会場の移動にあてられ、筆者はあいにく参加できなかったが、テムズ川でのリパークルーズが企画された。

肝心の学会の内容だが、パラレルセッションのため全てを聴くことが叶わず、興味深いパネルが同一の時間帯に重なることもあったのは残念だっ

た。しかしそれは、2019年現在におけるコンラッド研究の活発さを物語る証左であり、世界各国の著名な研究者と交流し、直接意見交換が出来た3日間は、大変充実したものだった。

筆者の出席したパネルからそれらの内容を振り返ると、1日目はコンラッドの書簡に関する研究、ポーランドやウクライナから見たコンラッド、コンラッドのテキストに見られる超自然的な世界から「エコゴシック」、ジェンダーまでを扱った“Gothic Conrad”。2日目はラテンアメリカのジャーナリズムと絡めた *Nostromo* 論と、筆者の無線電信論 (*The Conradian* 43-1 所収) による “Communicating Conrad”、ポーランドの SF 作家 Stanislaw Lem に見られるコンラッドの影響や、コンラッドと編み物 (!) についての発表から成る “Universal Conrad”。場所を移しての3日目の第1パネルは “Relationships” と銘打ち、本号に特別寄稿された Cedric Watts 氏によるケンブリッジ版テキストの批判的分析、日本コンラッド協会第4回全国大会で



来日された Keith Carabine 氏による、2016年に新たに発表されたコンラッドの書簡に基づく発表、そして Hatice Övgü Tüzün 氏による、*Arrow of Gold* とトルコ文学における「新しい女」の比較がなされた (左写真)。さらに思想・哲学系からコンラッドのテキストを論じ

る “Epistemological Conrad”、グローバリズムをキーワードとした “Conrad in a Global World”、家族や食の社会学的観点から迫る “Social Acceptance”、*Victory* を中心に、Graham Greene による評価、Orson Welles による幻の脚本、当時の石炭産業に焦点を当てたパネル、そして最後は劇団 *Imitating the Dog* による演劇版 *Heart of Darkness* の監督を招いての対談で締めくくられた。

このように、理論的なものから実証的なものまで、あるいは学際的なものから専門的なものまで、多彩なアプローチによりコンラッドに新たな光を照射する大会であった。個人的には今回で3回目の出席だが、その時代

## 学会報告 (英国)

に応じた批評の潮流は確かに存在するものの、研究者の年齢や立場を問わず、個々の関心に基づき真摯に取り組まれた研究であれば、どのようなアプローチでも歓迎されるのではないか（もちろんコンラッドのテキストの精緻な読みと、先行研究に照らしたオリジナリティの明確化が重要なのは言うまでもない）。その意味で、日本の会員による研究も英国で高い関心を持たれるはずである。コンラッド研究の最新動向を把握するだけでなく、日本におけるコンラッド研究を積極的に発信していく場として、海外の学会に参加する意義はますます高まりつつあると思われる。

さて、2020年の大会開催地はイタリアの予定であったが、世界中の他の学術イベントと同様に、COVID-19の影響で中止が決定した。本報告を執筆した2020年5月時点では事態の一刻も早い収束を願うばかりであるが、果たして世界的パンデミックを経験した後のコンラッド研究はどのような展開を見せるのであろうか。その意味で、次回以降の大会からも目が離せないだろう。

(えのきだ かずみち 広島大学 准教授)